法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

古代の性的シンボルを訪ねて

Horikami, Hideki / 堀上, 英紀

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化. 論文編 / 異文化. 論文編
(巻 / Volume)
6
(開始ページ / Start Page)
73
(終了ページ / End Page)
79
(発行年 / Year)
2005-04-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002009

Hosei University Repository

古代の性的シンボルを訪ねて

Looking for ancient sexual symbols in Europe

堀上英紀・HORIKAMI Hideki

はじめに

1994年海外留学（1年間）の機会を得て、ヨーロッパを訪れた際、主研究テーマである「各種アカントアメーバに対する新薬テスト」とは別に、副テーマとして、彼の地における「生殖器崇拝」に関する資料を収集することに努めた。それは、すでに報告（文献-1）したように、本邦でも神社仏閣や自然の中にご神体として「生殖器」が祭られており、その起源のひとつとして、古事記や日本書紀の中の記述に行き着いたことに起因する。そこでは、古代、「女性性器」には、苦難を切り開く力があるとされていた。しかし、広く知られているように記紀は、中国の影響を受けていることが明らかで、仏教（密教）の伝来と密接に関係していると思われた（文献-2）。その起源を求めて中国における文献をあたったが、文化大革命の影響もあって、生殖器崇拝に関する資料は乏しく、近年それらに関する新文献が散見されるのみであった。その一方で、チベットの密教寺院（文献-3）やネパール（文献-4）ではヒンドゥ教寺院に曼荼羅や木造彫刻として崇められている例が数多く残されていることが判った。

仏教発祥の地であるインドには、いまもカジュラホやコナーラクにヒンドゥ教の寺院遺跡が残され、外壁に彫刻された多数のミトゥナ像（文献-2）は

Hosei University Repository

世界的にも有名である。そして、ヒンドゥ教の礼拝の対象物は、リンガの形で表された交合像であることも判った。

東洋以外に目を転ずると、南米ペルーでは、モチカ時代（紀元1～5世紀）の墳墓の副葬品として性交を象ったリアルな壺が多数発掘され、儀式に用いられたと推測されている。首都リマにある天野博物館はそれらの収集でつとに有名である。イランでは、5,000年前の奉納用寝台上での男女の交合を表すテラ・コッタ製のレリーフや生殖器を象った壺が出土されている（文献-5)。古代ギリシャでは、大理石製のヘルマイ（男根を持ったヘルメス神の石柱）が街角に立てられ、ちょうど本邦の道祖神と同じ役割をしていたことが判っている。

種々の文献でアジア以外にも古代から「性的シンボル」が諸国にあることを知り、これらの起源や関連をぜひ調べたいと思ったことが、上に述べたことの動機であった。

古代ヨーロッパの性的シンボル

留学はまず初春のイタリアから始まった。北イタリアのヴェローナ大学生化学教室に籍を置く傍ら、フィレンツェ、ローマ、ナポリ、ポンペイ、エルコラノ、シチリア島、サルデニア島などの博物館や遺跡を訪れた。しかし、イタリアではいまも宗教的制約が厳格で、ナポリ美術館の一般公開されている展示室にはめぼしいものはなく、許可を得て特別に見せていただいた保管室でもこれはと思うものを見ることができなかった。

初夏にイギリスに渡り、ロンドン、シェフィールド、エディンバラ、インバネス、グラスゴー、カーディフ、ポーツマスと巡る中で、ケルト文明の女神像（シィーラ・ナ・ギグ）がアイルランドにあることを知った。

9月アイルランドのダブリン国立博物館でシィーラ・ナ・ギグの石像（図-1）展に幸運にも出会うことが出来た。この女神はまさにアイルランド版天鈿女（文献-2）であった。南アイルランドを巡る中、コークの市立博物館でシィーラ・ナ・ギグ像が、パリからスペインのサンチャゴ・コンポステ

Hosei University Repository

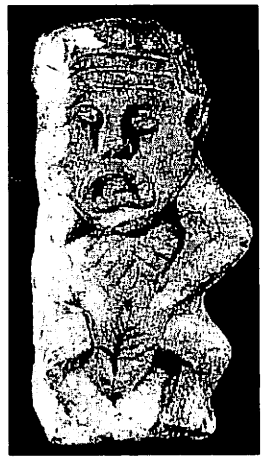

図-1　シィーラ・ナ・ギグ像

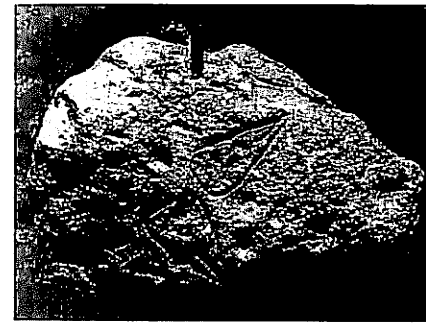

図-2　太古の女陰図

図-3　ローセルの女神像

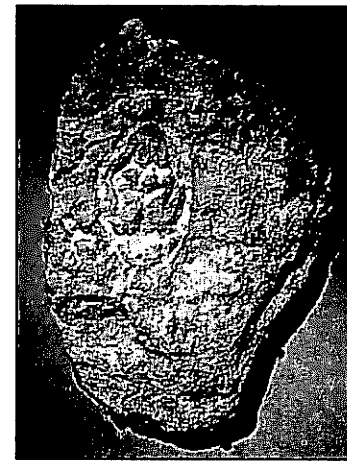

図-4　太古の性交像

ラに至るキリスト教の巡礼街道に沿って建てられた多くの教会の外壁に彫刻されていることを知った（文献-6,7）。

10月に移動したフランスでは、パリの南約60キロのGif-sur-Yvetteにある国立中央科学研究所の神経生物学部門にお世話になる傍ら、モンサンミッシェル、カルナック、ラスコー、レゼルジ、ボルドー、ルルド、マルセイユ、モナコ、

Hosei University Repository

ヌベールなどを巡った。その中のレゼルジの国立先史博物館で、偶然にもオーリニャック期の性的シンボル（岩に刻まれた女陰）に巡り会うことができた（図-2）。さらにそこで、紀元前2万年頃に岩壁に刻まれたローセルの女神像（図-3）が、ボルドーのアキテーヌ美術館に展示されていることを知った。アキテーヌ美術館では、太古の性交像を岩に刻んだもの（図-4）も身近に見ることができた。

フランス滞在中、トルコのイズミールで開催された国際寄生虫学会での報告のため、2週間トルコへ出かけた。イスタンブールを拠点にイズミール、エフェソス、アンカラ、カッパドキアを訪ね男性性器を象った壺（図-5）や紀元前6,000年頃に作られチャタル・ヒュユックの地母神像（図-6）を目にすることができた。

図-5　男性器型壺

図-6　チャタル・ヒュユックの地母神像

クリスマスを目前にした12月、ギリシャに向かった。アテネ、デルフォイ、コリントス、スパルティ、オリンピア、パトラ、ティノス島、デロス島、クレタ島（ここで阪神・淡路大震災のニュースを知った）を巡る中で、デロス島では、男根の代理石像（図-7）と、アテネのキクラデス博物館では紀元前3,000年頃に作られた数多くの大理石製女神像（図-8）と対面できた。

Hosei University Repository

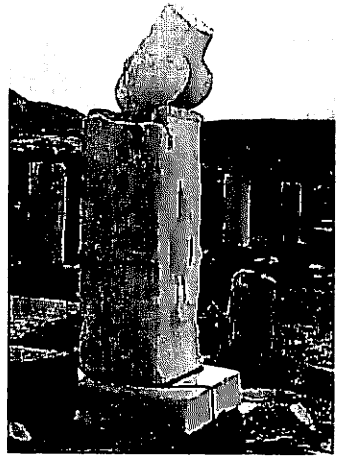

図-7　デロスの男根像

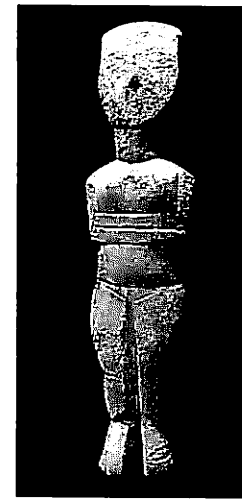

図-8　キクラディック女神像

ミッシング・リンクはあるか

結局、留学中に2週間滞在したスイスを除いて訪れた全ての国で、太古及び古代に、多かれ少なかれ"性"が神聖視されていることを確認することができた。しかし、収集旅行の最中、フランス大西洋岸のクロワジックで一晩お世話になった日本画の田淵安一画伯から旧石器時代の性的シンボルは、生殖器崇拝とは異なるのではないかとのご指摘を受けた。いわゆる神の概念の誕生は、ほぼ1万4,000年前の古代中東に源を発するようである（文献-8)。レゼルジの国立先史博物館で目にした女陰マークは、それよりさらに古いオーリニャック期のものである。文献-9～11によれば、それは増加と繁栄のシンボルと言うことになり、男根マークの出土が極めて乏しいのも納得がいく（なにしろヒトの精液中に精子が存在することは、オランダのA.レーウェンフックが手作りの顕微鏡で発見する1677年まで誰も知らなかったのだから)。最古と思われる逆三角形の女陰マークを見たときの感動は今も蘇ってくるが、その一方でローセルの女神や紀元前2万5,000年に製作されたというオー

Hosei University Repository

ストリア・ヴィレンドルフの女神（図-9）と異なり、本邦の生殖器崇拝物と同様にその部分のみが身体から切り離されて単独で表現されていることに驚きを覚えた。しかも、複数個が集まって彫られていたのは何を意味するのであろうか。

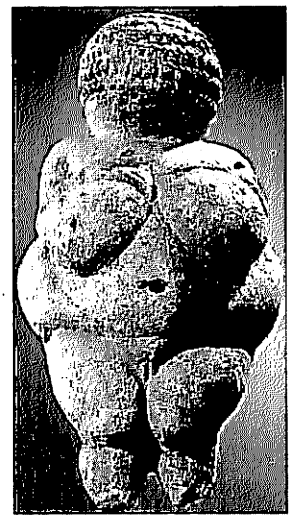

図-9　ヴィレンドルフの女神像

アフリカで誕生したとされる人類が世界へ移動していった経路と生殖器崇拝との関係を探りたかったのであるが、今なお資料の入手不足と勉強不足を思い知らされている次第である。現在見つかっている最古の性的造形物と中世以降に世界各地に見られる生殖器崇拝物とを結ぶミッシング・リンクは見つかるのであろうか。近い将来それを探す旅に出たいものである。

Hosei University Repository

■参考文献

(1) 堀上英紀（2000）「生命科学からみた生殖器崇拝」法政大学教養部紀要　社会科学・自然科学編　第113・114号17～44頁
(2) 堀上英紀（2003）「性教育と生殖器崇拝」法政大学教養部紀要　社会科学・自然科学編　第124・125号85～93頁
(3) 岩宮武二（1987）「岩宮武二写真集　ラダック曼荼羅」岩波書店
(4) ジュゼッペ・トゥッチ（1982）「秘の美術 ネパール」大陸書房
(5) ロベール・シュリュ（1982）「秘の美術 ペルシャ」大陸書房
(6) S. Cherry（1992）「A guide to SHEELA・NA・GIGS」National Museum of Ireland
(7) A. Weir & J. Jerman（1986）「IMAGES OF LUST Sexual Carvings on Medieval Churches」B.T. Batsford Ltd.
(8) K. アームストロング（1995）「神の歴史」柏書房
(9) S. ギーディオン（1968）「永遠の現在：美術の起源」東京大学出版会
(10) M. ギンブタス（1989）「古ヨーロッパの神々」言叢社
(11) M. エーレンバーグ（1997）「先史時代の女性　ジェンダー考古学事始め」河出書房新社